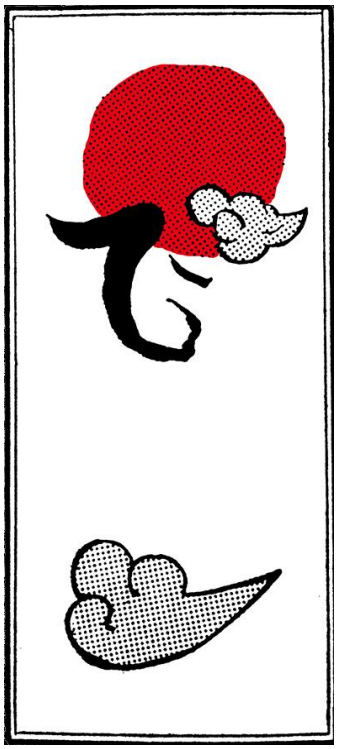

第 34 号
月 1 回 発 行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所:愛媛県西条市
上市甲 720-1
TEL:080-2986-0856

領　綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

神道(十一)(大和世界の建設)

竹葉 秀雄

古事記

宇宙の創始

―ロゴス Logos―

仏教の教理には二締説と三締説がある。二締説は真宗などで重大視せられている。真締と俗締で、真締は空観にたつもの、俗締は色観にたつものであるが、法華経は、空締(真締)と仮締(俗締)も本当の真実ではない中道から観て初めて実相へ捉えられる。これを中締と言う。花や山や鳥や川をやがて消え去る空なるもの、ただ因縁によりて現じているにすぎないとするのが空締であるが、それらはいずれも一方に偏しているので、色のあるのも事実、消え去って空となるのも事実、空は個々別々のものとして現われ、個々別々のものは皆空なるものであって、色即ち是れ空、空即ち是れ色、色は空に異ならず、空は色に異ならず、空締も仮締も別なものでないと、その関係を明かにするのが中締である。これを中道実相といい、三締円融というのであるが、この三締から十如是をみると、

仮締は、本末皆妙仮で、如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等、と読んで仮締の義を顕わし、相、性、体等は皆同じでないことを示す。

空締は。是相如。是性如、是体如、是力如、是作如、是因如、是縁如、是果如、是報如、是本末究竟等如、と読んで空締の義を顕わし、相、性、体、等は皆如にして一味平等であることを示す。

中締は、相如是、性如是、体如是、力如是、作如是、因如是、縁如是、果如是、報如是、本末究竟等如是と読んで中締の義を顕わす。此の時は、如を「かなう」と訓んで、是は非に対する是とする。中道実相は諸法皆是にして非無しとするのである。即ち、相、性、体、力、作などの法の一つ一つ皆是に如う所であるとするのである。

上の図(図省略)は、真言の「字輪観」である。此の中「如」の字を起点とすれば仮締となり、「是」の字を起点とすれば空締となり、「相」の字を起点とすれば中締となる。十如是と神道との関係は後述する。

第四章 士道論
～第一節 立志～

菅原 兵治

立志

農士道を究明せんと欲せば、私共は先ず士道とは何ぞやということに就いて深く研究する必要がある。故に本章に於て士道に就いて稍々詳細に論究し、次章農士論研究の素養としたいと思う。

「之を仰げば弥々高く、之を鑽れば弥々堅き」孔夫子の大聖としての生涯も、その人格修行の第一歩は「十有五にして学に志し」た時にあったと言い得るであろう。立志以前の人生は無名の溟海である。この溟海に彼岸遥かに邁進の一路を照らす燈明が即ち「志」である。山鹿素行も其の著士道に於て「人既に我が職分を究明するに及んでは、其の職分をつとむるに道なくんばあるべからざれば、ここに於て道というものに志出来るべき事なり。たとえば京へ行くべきと思うに及んでは、其の道を知らざれば能く行くべからず。知らずしていて行かば皆邪路に入るべきなり」と述べているが、実に立志は人生の開眼である。これなかりせば人生は要するに一団の肉塊の盲転であり、随って無明の欲念の盲動に過ぎない。

志とは何ぞや

然らば「志」とは何か。斎藤正謙（拙堂と号す。津藩の人）は士道要論の中に次の解説を与えている。志の字はもと「士」、「心」の二字を合せたる文字なれば、士たる者の心には、志なくてはかなわぬものなり。また志といえば道に志す外なし。

一体古来志の解義に、之心説と士心説との二つがある。之心説に従えば心のえく処―即ち心の動く処、心の欲する処の意で、現代の語を以て言えば心理的欲求の意に解され得る。之に対して士心説に従えば、士たるの道にかなえる心意の言であって、倫理的要求の意を有している。右の二者の中、私は後者の士心説を採る。（然し之心説が全然間違っているというものではない。之心の内容が道義的ならば、それは士心である。）かくて私共は三輪執斎が「学問の道如何」との問に対して「士心を立つるに在り」と答えたる、簡なれども要を得て余す処無き言の真意も解し得られるであろう。

大善は名に近く小善は徳に近し

三浦 夏南

年の初めに一年の大計を立てるに当たって、それぞれの分野に目標とするところを定めた。その中で学問に関しては中江藤樹先生について研究することを今年一年の志とすることにした。なぜ中江藤樹先生を選んだかと言えば、勿論我が郷土伊予の地に深い縁のある先哲であるということが一つであるが、中江藤樹先生と言えば「孝」の実践に於いて明徳を明らかにされた偉人ということが一番の理由である。私も今年三十歳となるが、二児の父となり、親としての責任が大きくなる一方で、父母も社会の第一線を退く年齢が近づき、老後の父母の将来も心に留めて置くべき年齢となった。これまでは父母に与えてもらった教養を基礎としてさらなる学問に励み、自らの身を立てることを主として来たが、これからは子供と親の間に立って、家を支え興して行くことを主としなければならない。そうなれば、国の元気の発揚は尊皇忠義の本心を本とする如く、家に於いては崇祖孝行の誠心が礎となることは疑いがない。そう思い立って今年は中江藤樹先生の学問に集中しようと決心した次第である。

中江藤樹先生と言えばあまりにも有名であり、「真の孝行に生きた哲人」「日本陽明学の祖」と言ったイメージがあったが、実際に先生の著書に触れたことはなく、先生の伝記で人生の概略を知っている程度であった。現在は先生の事績学問を解説した本を何冊か読み藤樹学の輪郭を知り、『藤樹先生全集』を購入して、先生の主著の一つ『翁問答』を読み進めている最中である。

いくつかの解説書を読む中で心に残ったのが、中江藤樹先生は「大善は名に近く小善は徳に近し」という言葉の通りの人生を送られた偉人ということである。大きな目立つ良いことというのは、世間から褒められ、栄達にもつながるので小人は挙ってやりたがるが、日常の小さな善は世間の目には見え難く小人は行いたがらない。しかし、見えざるところに徳を積む君子は事の大小、世間の是非に関わらず、本心の善意から行動するので、日常の小さな善にこそ精進するものである。この言葉には自らの心に刺さる鋭いものがある。道を学び、大義を知れば、天下国家を動かさんとの大志を抱くが、その大業の基礎は常にこの一身にあり、一家にある。そして一身一家が進んで行く道のりは日常の生活を離れて存在せず、日常とは

小事の積み重ねである。この根本を怠って大業を望むものは、たとえ才覚に恵まれ、天運を味方にしたとしても一時の成功はあるかもしれないが、長い目で見たときには破滅の道が残されるのみである。藤樹先生は『翁問答』の中で学問は忠義孝行を本心から行うための修行であり、これら日常での実践を離れた学問は俗学であると繰り返し言われている。日常の中に忠孝の誠心を発見し確立すること、これが家を興す根本であり、ここが確固として定まった一家に初めて国家再興の大業へと臨み得る資格が備わるものであろう。

本年は大善への憧れを追うことなく、目前の小善を着実に積むことを第一として『藤樹先生全集』に学んで行きたいと思う。

とよくも農園だより

三浦　杏奈

新年を迎えてから、はや一か月が経ちました。年始は家族でゆっくりしながら、今年の目標をそれぞれの分野で決め、紙に書いて壁に貼り、気持ちを新たに清々しい気持ちでスタートをきることができました。

今年の作付け計画も練り直し、里芋は減らす方向にし、回転率の良い葉ネギと、ほとんど周年で収穫できるアスパラガスの栽培を主軸にすることにしました。年内にほとんどの収穫作業を終えた里芋はいったんお休みし、新年はアスパラのハウスの伏せこみから始まりました。ハウスのビニールを二重被覆することで、ハウス内の温度を上昇させます。内ハウスは風のない日を選んで父にも手伝ってもらい、義兄と主人の三人で協力し、半日で終わりました。農業は、力仕事ばかりではなく、マルチや路地のトンネル、ハウスのビニールをはる作業も多いため、風があると一人で押さえながら作業を進めることは困難です。人数が多ければ多いほど、効率よく丁寧な仕事ができます。内ハウスをはり終えて三週間が経過した頃より、アスパラが地面を突き破って芽を出し始めました。水やりにいった主人と、今年初めて出るアスパラを見た時は感動しました。たった一か月ほど前に株を切り取られ、根元をバーナーで焼かれたにも関わらず、禊を受けて息を吹き返したかのように逞しくぐんぐんと成長する姿は頼もしく感じられました。現在は一日十キロ以上のアスパラをコンスタントに収穫し、高値時期に立派なアスパラを出荷できています。

主人が農業に参戦してから、ネギの出荷箱数も飛躍的に増えました。葉ネギの栽培は収穫した後の出荷作業に非常に時間がかかります。冬の倉庫は日があたらず寒いですが、義兄と主人と色々なことを語らいながら作業する毎日のこの時間はとても貴重で、大変ながらも充実しています。

来月は、残りの里芋の収穫、アスパラの朝・夕二回収穫スタート、ネギの出荷と、寒い中で各野菜たくさんの仕事があります。春がくるまでは寒さの厳しい日が続きますが、家族で協力し、日々の仕事を丁寧に進めていきたいと思います。

★今後の予定

二月より勉強会を再開する予定でしたが、新型コロナウイルスの再流行を考慮し会議形式の勉強会に就きましては再延期させて頂く運びとなりました。大変申し訳ございませんが、ご理解のほどをよろしくお願いいたします。個別での勉強会に関しましては、対応させて頂く方針ですので、事務局までお電話いただければ幸いです。

★一燈照偶　万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

一般会員	三千円
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円

★振込先

「ひの心を継ぐ会」
愛媛銀行・本町支店・普通預金
口座番号　６－４２７３５

※年会費未納の方はお手数ですが、お振込をお願い致します。
※入会希望・退会希望の際は、事務局までお問合せください。